

156)

漢方製剤による咽喉頭異常感症の治療成績

三重大学医学部耳鼻咽喉科

○山際幹和, 坂倉康夫

目的 咽喉頭異常感症は「耳鼻科的視診で局所に訴えにみあうような器質的病変がないにもかかわらず、咽喉頭部に異物感などの異常感を訴える状態」と定義されており、西洋医学的治療では難渋する例が少なからず認められる。しかしながら、東洋医学では本症はどちらかと言えば治しやすい病態としてあつかわれている。そこで、我々は、漢方製剤を西洋医薬と同様の概念で病名投与した場合、①期待通りの効果が得られるか、②西洋医薬と併用した場合はどうか、③いわゆる Placebo や西洋医薬と比較した場合差があるかなどの点を検討した。

方法 当科および関連病院耳鼻咽喉科を受診した患者に、原則的には受診順に、半夏厚朴湯（女性）、柴胡加竜骨牡蛎湯（男性）、セレナール（男女）、安中散（男女）、セレナール+半夏厚朴湯（女性）、セレナール+柴胡加竜骨牡蛎湯を2週間投与し、1、2および3（投薬終了後1）週目に効果を判定した。その場合、治療前の異常感が80%以上改善した場合を著効、50%以上80%未満を有効、30%以上50%未満をやや有効、30%未満を無効として判定した。

結果 半夏厚朴湯と柴胡加竜骨牡蛎湯は速効的ではないが、セレナールに匹敵する効果が得られ、投薬終了後もその効果は維持された。セレナールは速効的であるが、投薬終了後再燃する例が少なくなかった。安中散の著効+有効率は低くはないが、著効率は半夏厚朴湯や柴胡加竜骨牡蛎湯のそれに比べ低い。セレナールと漢方剤の併用は場合によってはマイナス面が強くてた。

結論 漢方製剤は本来は東洋医学的診断を行ったうえで随証投与すべきであると思われるが、今回我々が検討した範囲では西洋医薬と同様の概念で投与しても、十分有用性が高かった。しかしながら、西洋医薬と併用する場合、ある程度西洋医薬の証を念頭においたうえで併用すると一層の効果が期待できると思われた。耳鼻咽喉科領域では咽喉頭異常感症は漢方製剤の単独あるいは併用投与の効果が期待できる病態のひとつであると結論した。